

Ⅲ-4 発達の段階を考慮した環境学習



環境教育・環境学習は、幼児から高齢者までのあらゆる年齢層に対して体系的に行われることが求められており、それぞれの発達の段階を考慮して進めることが大切です。特に、発達の段階に応じて、「親しむ」→「知る」→「行動する」へ比重を変えて行くことが有効となります。

幼 児	周囲の様々な環境に好奇心や探究心を持って関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養うよう援助していく
小学生	低学年 自然環境や事象に対する感受性や興味・関心を高めるとともに、自然のすばらしさや生命の大切さを感得するよう配慮する
	中学年 身近な自然や環境にふれ、自分や他の人が使っている物（資源）、ごみなどについて問題を見だし、追究できるようにする。自然や社会との関わりや体験学習をより重視する
	高学年 種々の体験や学習を通して、多面的に思考できるようになったり、収集した情報をもとに判断したり推理したりすることもできるようになるので、自然や社会のつながりや循環という考え方を身に付け、より主体的に環境と関わり、環境を大切にすることができるようにする
中学生	環境に関わる事象について、具体的に認識させるとともに、因果関係や相互関係を把握し、問題解決を図る能力が育成できるようにする
高校生	環境問題を総合的に思考・判断し、賢明な選択・意志決定が行えるようにするとともに、環境保全や環境の改善に主体的に働きかける能力や態度が育成できるようにする
青年～成人	人と環境の関わりについて正しい認識を持ち、日常生活における環境に配慮した行動の実践を進めるとともに、年少者を指導する立場としての自覚が求められる
高齢者	長い社会体験を通して習得した専門知識や生活の知恵が豊富であり、物を大切にするといった伝統的な良きライフスタイルを次世代に継承する存在として、また地域や家庭において環境学習の指導者、環境保全活動の実践者となることが期待されている

